大正十一年九月十四日印刷納本　大正十一年九月十五日發行

光

大正十一年九月
第十五號

◇天華香洞錄抄……西田天香
◇物質は正直なり……住田藏人
◇御子息御重態の際に於ける天香さん……扶桑
◇湯西川溫泉にて……かなめ
◇獨白……八田勝二
◇托鉢のあさ……三石勝五郎

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願不二の光明によれる生活
費用供養されたる浄財

◇眞木子……磯山松男
◇一宿兩餐の客となる……松井生
◇托鉢者を迎へて……石田哲明
◇ばか平の話……松下吉衛
◇惡魔の群……吉田暎二
◇返照錄……遠近兄姉

一燈園◇宣光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は卽ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委れ佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し、歸一の大願に參ぜん。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成二就大圓覺一

別願　將二來世界眞平和一

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に卽して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

卽ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天園、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戯三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとよく言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては卽ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

天華香洞錄抄

——（大正四年中のものより）——

西田天香

○法藏比丘の願は即我願也。

○未徹底の者は與ふるときのみ他を救ひ得ると思ふ。透徹底の者は受くる事によりて他を救ふ。

○如來白毫中より養はる。

○金に番をさすは差支なきも、金の番をなすは恥しき事也今や世界のもの皆金の番人なり。

○行乞やふむはむらさきの雲にして。

○審かず誓はず邪婬せず惡に敵せず汝の敵を愛せよ。

○金を借りられるやうな態度は缺點あるが爲也。

○下らぬ用につかはるゝやうな態度は自分が一行ならぬ故也。下らぬ用たりともたのまれたら、一行にて爲すは勿論也。如此、愚魯三昧の修養も亦必要なり。

○第二義の事にて同人を慰めんとするは、己、緊張してをらぬを證明す。

○一切の罪は我足らぬ故也。皆懺悔々々々。

○後光のさすまで眞面目たれ。

○諸開山の試みざりし體度、諸佛の仕殘せし行履。

○諸佛聲をそろへてまち給ふ。

○悟りといふ程のものもなし。唯迷ひを去らしむるのみ。

○天華香洞に主張なし、唯他一切の主張の執を破するのみ

○己、人の禮を受くべからず、必ず佛に禮をいはせよ。

○一切に佛心あり、能く信じてその不都合をせむるな。一切己の不德なりと、他の責任をも倶に引受けて懺悔出來ること自分は幸福也。

○達人達了すれば此儘山河大地悉皆成佛底なり。

○一絲不懸此不汚染淸淨之戒體に歸る是解脫也。

○人此境地に歸る事の多き程十界に對して慈悲となる也。

○忽然として無明緣起し、人智を開き、自在を失ひ、一密淸淨の戒體破れて、十界の大波瀾をまき起し、愈智をみがき愈葛藤を大ならしむ。文明は海を潜り空を飛び微を極め細を盡して而も悉く又破壞の具となしぬ。近時歐洲大動亂やがては世界大爭鬪となるの時きたらんなり。淺ましく〱。

○戒體を成就するを一に埋德といふ。

○埋德の多きだけ佛に近きなり。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

○佛は大圓覺王なり。齊家治國平天下の道は、此佛に近き人格能く是を爲すなり。德少きものゝ長たり主たり帝王たりする事は一時の變態にして久しく保つべからず。

○若し小策を弄して德を埋むるを忘るゝときは、積德も遂に消滅するの時あるべし。

○日本は神國なりといふは、神德の深く埋まれし國なりといふはよし。然らば此德を埋むるを忘れなば、いつか亡ぶる道理なり。神國なるが故に一日も道を失ふを許さず。

○如上の道理によりて□□が世界を統一するなどいふは潜上のきらひあり。德多き民の集れる國、德深き帝王をいたゞきて、その國初めて世界を統一すべき也。

○眞に世界を天國となし平和圓滿の淨土となさん爲には、先づ此戒體を成就すべきなり。一人一町村一郡一國みな自然の戒體あり。勅語の所謂德を樹つる深甚ならざる可らず是を爲す國は平和の主宰者たるべし。

○現今世界の人類は、智、主觀、概念、認識などいふものを主として、神、佛、自然を失へるなり。故に眞德眞戒體の如何なるものすら了解せず。神をいへば自家主觀の神、佛をいへば自造觀念の佛。かるが故に齊しく一佛一神に信服して已をひれふす事を好まず。百人あれば百の神あり。千人あれば千の佛あり。神々佛々、互に相排し相疑ふ。如此は是神にあらず、佛にあらざる也。

○今や世界は眞の神、眞の佛に歸るべき必要あり。「眞佛眞神とは何ぞや」といふ聲をはなて。次ぎにそれに相即してその前に跪坐拜禮して已のそれとあまり遠ざかりあまりに世を混雜せしめたりし罪を數へ懺悔すべし。

○此一戒體明了ならば是れに歸るを善となし、是に遠ざかるを惡となすを得べし。玆に於てか世界思想の根本に進退をなす標準を得べきなり。此一證明あらば各人其歸趣を知るべし。近時學者政治家の如き口に互に善をいひて其力を鬪はし互に神に祈りつゝ相爭ふが如きは爲さゞるに至らん

○此戒體を知るには人天師の出現をまたざる可らず。

○今の所謂自稱人天師に就て其眞僞を調査するの必要あり

○之れを調ぶる人は所謂其爲す所を見、其言ふ所を聽き、具さに理想實現の種子なるや否やを判ぜざる可らず。此事實に難中の難なり。

○若し之れあらば王者といへども自ら謙遜して此三寶の奴となる雅量なかるべからず。かゝる王者を轉輪聖王とはいふ也。堯舜の如きは之れに近し。

○乃木將軍の神佛をきらひしが如きは、今の所謂佛者傳道師によりて建立さるゝ神佛にあきたらざりしなり。而して王者をして轉輪聖王たらしめんとせし事は、中朝事實を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

陛下に奉りしによつても明かなり。轉輪聖王といふ名、將軍之れを用ゐず、而も王者皇室を理想的たらしめん熱誠の對象は茲に至らしめんとてなり。即ち天理を盡すべき中心天裕を得て天德を地上に成就せしむる權化たらしめんと祈りしなり。皇室帝王を如此にして、民德を又忠誠無二ならしめんと導き、己その模範となりて誠を盡貫したる也。

○君、君たり、臣、臣たらば、天國は現ず。

○君若し所謂轉輪聖王たる德深厚ならば、民は之れに依るを最幸福となす。政をしろしめすことも事簡にして盡すべし君若し此德缺くる時、民心その依る事の不安を思ふ。茲に個人思想起り、自由を求め、民權を叫び、政權を爭ひ、はては惡平等の思想をうむなり。

○君、民の心を以て己の心となし、民は君を己の父と思ひ上下心を一つにするは、何れも自然の戒體を知り其れに信從する心なかるべからず。

○自由を要求し個人の權利を得たる世界に於ても亦統一歸趣を失ひ葛籐又葛籐、爭鬪又破壞、寧日なきに至つて茲にまた救世の大願を起し蹶起するものあり。是は必ず其自然に歸ることによりてその力を得。宗教家はそれなり。

○眞の宗教家は時代にこびず、唯佛の命のまゝに動き、常に喜んで十字架を負ひ、十字街頭に行乞しつゝも足いつも紫雲を踏む。

○かゝる人天師若し出でなば、國家はよろしく之れを政治圈外におき、之れに教をきゝ道を尋ね、國民隨喜の先蹤を爲すべきなり。

○國の眞正に善良に發展するは（善良といふは無理せぬことなり）此人天師（眞の）を得て之れに隨喜し政をきくことに始る。

○外交は人天師に托するには餘りに危しなど思ふは、外交を術略と思ふ近代政治家の誤なり。眞の外交は誠意なかるべからず。其時に敗れたるが如きも誠意あるは遂に全し。近時世界の外交は、國を早く亡ぼすことを知らざる近眼者流の爲す外交なり。

○此一誠を根本的に了解せざる外交家はたとへ政府にあると民間にあると右黨たると左黨たるとに論なく齊しくみな危し。五十歩百歩のちがひあるも非は即非なり。此誠、眞の誠を基礎とする外交は現時一つも見る能はず。

○眞の外交を爲さんと欲せば、先づ自の身心に戒體を具せる。次ぎに己をすてゝ他を愛せよ。次ぎに此心を身に爲し家庭に及ぼし兄弟朋友親戚に及ぼし町村に及ぼし國民に及ぼすべし此心ありて始めて外交を論ずるの資格あるなり。

○德を埋むとは多く貢獻する所ありて己その報を受けざる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ことなり。一切の爲めに動靜して已あることを思はざるの謂也。

○人が德を埋むることの必要あるが如く、國も亦德を埋めざる可からず。近時の外交はその貢獻すること少くして、已、報をむさぼるなり。危し〳〵。

○天は必らず善をたすく。惡は長き時間に於て遂に天の容るゝ所とならざるなり。

○先づ己の罪を懺悔し執心を捨てゝ佛に還れ。棄恩入無爲是眞實報恩者。次に汝の隣を愛すべし、愛は十字架を伴ふ十字架によらざる慈悲なし。次に隣人と一つになれ。次に隣家隣町隣郡隣國、次に東洋相親め。此親しみたる體を以て又西洋を愛すべし。如此にして世界は始めて平和なるべし。眞の文明は是也、又是より起るなり。人自ら捨てずして世界の平和生れんを望むは緣木求魚と同一なり。

○獨逸の能力が他の國民のそれに比して優勢なるにもせよ「各國の領域が各國民の能力によりて分配せらるゝものなり」といふは、己の能力を一般人類の爲に無價寄與する慈悲なき爲なり。佛は常に一切の罪を負うて能力を衆生に與ふ。愛、慈悲の依て起る所以なり。能力を他に寄與して自ら謙遜にし、他の爲に己を後にする大雅量あらば、獨逸は世界より悅服されて眞に統一せしなるべし。能力なきものに與へておくは危險なりといふも一理なれ共、與ふること多くして而も其恩を思はず、低能以て大を保たんと慾張るものに更に慈愛を與ふるは大人の所爲なり。此心今や愈必要となれり。

○假りに此無鬪爭の慈悲の外護として、武士道の必要ありとも能く忍び耐へ謙遜にして終りに不得已劍をぬかば天人倶に加擔すべきなり。しかも尙無鬪爭の王三昧には及ばざるなり。

○禪定をはなるれば一切事皆非也（個身）。

○信は公夫より如來へ直入する法也、妄想の巷より禪定の中府へ直入するの法也。眞の信は眞の證と不二也。

○宴坐をはなれては一切事皆非也（法身）。

○信は（此宴坐に對する）一切界の大複雜より大圓覺に直入するの法也。此信たち次ぎきに如法に隨て一切生活を整理すれば、地上は天國となる也。

○今の世、現實にあるものは現實にとらはれ、理想にはせるもの又理想に囚はる。此二者をして能く縛を解かしむるもの、夫れ唯無相解脫三昧あるのみ。

○平等即差別、色即是空。あゝ語何ぞ簡なる。而も一度その妙趣に至らんと欲すれば渾身の勇を奮はざるべからず。

○今にして此體をねらざれば他日大事をなすときその任に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

堪へざるべし。

○白隠も病めり、慈覺も病めり。法然上人も四十三歳より一行となり、親鸞五十餘歳にして教行信證を完成したまふ關山國師の大燈國師に參したるも亦五十一歳の頃のやう也若し今より眞に毫厘の水も洩さず一行たらば多少の報恩の事業の礎を作るを得んか。

○恩報の事業とは何ぞ。地上にも天國を來す事也。理、事一如の眞境涯を體現することなり。

○釋迦曰く、たとへ一切を得度せずとも、得度の種子を下せりと。我亦たとへ此身のあらん間に形にあらはれる事のよし少なることも其種子さへ眞實ならば、いつか芽をふき實を結ばん。

○此種子の眞實なると共に之れを慥に土ふかく埋み成熟に堪ふる力あるものとしておかねばならぬ。こは忠實に心身に體用して德を埋まねばならぬといふことになる。

○一方に十字街頭に和泥合水すると同時に少しもその態度が一行三昧と離れてはならぬ。闇の巷に光明をもつて下らねばならぬ。まばゆきものでなくてはならぬ。路をあゆめば御光のたちのぼるもの。

○すりきつて〳〵〳〵慈悲の光のみ。

○維摩經偈中

雖知諸佛國及與衆生空　而常修淨土敎化於群生

此「淨土を修め」に注意すべし、此現實を理想化するといふことは理想化したとて畢竟空なれ共、迷執の爲めには常に淨土を建立しに導かねばならぬ。

眞解脱のものは我相人相壽者相なし。故に淨土を建立する必要なし。唯然らざるものにのみ淨土の必要あり。現代の要求は其最大にして根本的なるものにして尙淨土を要求する以上に出でざるなり。故に先づ是を與へざる可らず。

淨土を建立せんと欲すれば(生活とも)戒體を成就せざるべからず。戒體を成就するには不二の一行をはげまざるべからず。

○信行具足の南無阿彌陀佛、

○空華なれども、爲衆生、萬行を修し得る底の水月道場裡の無相座。

○是等のこと、ひとへに佛力によらざるべからず。

○佛力による戒體成就は是法樂三昧なり、苦行にあらず。如法の禪定は是安樂の法門なり。

○定力によるはたらきならずば大事をなす能はず。

○宴坐の力によるはたらきならずば大事を爲す能はず。是をもつと具體的にいへば

少しもうしろ髮引かれぬ起ち方

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

少しも躊躇せずにやれる起ち方

少しも他に求めぬ起ち方

徹底して少しも他に求めざれ、唯一度び死ね。次ぎに佛の活かし給ふや否やを嚴密にしらべよ。（托鉢＝如來白毫の供養による事）己の活きることによつて少しも衆生を躓かしめぬ法。

始め菩提心を起して供養するものにても幾度かその然るや否やを調べよ。之れを爲すは常に活きんと思ふ勿れ。常に自ら活きんと執せざるには、常に無相佛と與にあれ、常に十字街頭にあれ、常に行脚の風であれ。常に行乞の態度であれ、戰々競々として薄氷をふむが如かれ、常に下にあれ、常に六萬行願に任せよ。

人の名によりて衆生を引受くるな、問題を引受くるな。唯神によらしめよ。神による方法を自分の行にて示せ。

○かくて來れる福田は眞の佛子を供養する。次ぎに

第一　此道を修するものに分ち與へよ。分ち與ふるには不陰德を愼ましめよ。之を愼ましむるには己まづそれを示すべし。之を與ふる事に無執着ならしむる必要あると同時に之を受くる者に不陰德ならぬやうにするは偏に己の人格によらざる可らず。

第二　此道を修せずとも求道の心ある貧しきものに與へよ。與へて此道を修せしむる因を作れ。か丶る場合にもまた唯衣食のみを與へよ。道を修するにさわりあるものを與ふる勿れ。

第三　求道の心なきものにも分ち與へよ。祈ることをも知らざるものに對しては代つて祈を爲すべし。か丶る場合に於てもまた不陰德ならぬやう愼むべきなり。

第四　かくして尙餘りあらば神の名によつて保管せしむべし。

眞の佛子は直ちに人を救ふ聖業に從ふ。第一のものは之に次ぎ第二のものといへども又少分づ丶の聖業に參加すべきなり。かくして順次人格を作り福田を分ちて軍糧となし、修業出來しものに分ち與へしむ。

○眞に如來白毫中より與へられるものは、その佛にさ丶げさす迄に衆生を成就す。救世軍にしては克己週間などその意味にかなふ。唯更に必要なるは、人の生活の根本方法に對して痛快なる解決を與ふる必要あるなり。此事なくば惡魔は亡びず、折伏は徹底せず。

○眞に親に孝ならんとせば三昧より下るべからず。眞に君に忠ならんとせば、また此三昧より退轉すべからず。棄恩入無爲是眞實報恩者。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

○己のからだの爲に人の手をつかはぬ態度。他の人の事をなせば、己の事は他が代つて爲すものなれ共、己の身邊の小事を己自ら爲さゞれば、此身を中心として學ぶものを躓かしむ。此處能く〳〵思ふべし。

たとへば下駄の始末、足袋のせんたく、日々の掃除、ふとんの上げ敷き等、他の重要なる事をたのまれたとき、他の人に爲さしむるは差支なけれども、そのなさぬ態度が他の學ぶ者を躓かしむるなり。少くとも己を持することは己自ら爲すを勉むべし。

○受くることを思ひ切てつゝしめ。

○受くることを愼み得るは、己常に十字街頭にあつて又一切のことを人の名によりて引受けざる要意必要なり。

○受くるときそこに與ふるにもます救濟の大事業あり。

○受くるときのはたらきは實なり。受くるものは粕のみ。與ふるときのはたらきは實なり。與ふるものは粕なり。

○與ふるときは惜む勿れ、たゞ受くるものにその受くる心もちを敎へよ、身を以て。

○よきものを受けざれ、如何なるよきものも解脫のものには、さわりなけれども、多くの人を成就する爲めには、戒相的のものとなして受けよ、受けて戒相的のものとなすもよし。戒相的のものこそ尊きものなるを敎へよ。

○古きもの、單純なるもの、執着なきもの。

○我之れを行ひ、園の同人に之れを爲さしむ。如此することと園の維持に苦まず。餘裕あれば小僧(不二)を養ふ。小僧を養ふ爲めに無理をせず、佛の衣食あまらずば之を斷るまでのことなり。佛に養はるゝ身持をなさゞるものは懺悔して冥加を納むべきなり。

○自ら活きぬものは自ら動かず、自ら動かざるが故に金の必要なし。如此きものは常に他の爲めに自在に諸方に遊步するものなり。

○かゝる生活を爲すものは隨處々々に福田生る。之れを用ふると否とは別に仔細あり。

○一燈園の地料と家の修繕はその家にありて仕事をなすも可なり。又托鉢底にてなすも可なり。

○住むものなくば(此意味に於てくるものならば)他に貸せばよし。

○かくして他の一切の寺院敎會がつまづくべきを一燈園はづまずかざれ。天華香洞は尙のことなり。今や天華香洞は三世十方を貫いて根本的救濟の光なり。此光、微粒子といへども以て何千何萬の靈をすくはん。此一念子一正息は幾百萬の金にもかへられざるなり。此一念子を目前の小問題の爲めに費すは惜しきものなれ共、此一念子なしに大小の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

問題に契緣出來ぬは又自在なき也。光りを失はずに入店垂手するの必要。入店垂子を恐るゝは又自在なき解脱となるのきらひあり。かゝる意味に於て大小の問題も研究の必要あり。何れ一度は此大小問題の爲めに靈鷲山王三昧より下らざるべからず。しらべ盡して一行となれ。

二十餘年曾辛苦　爲君幾度下蒼龍窟

○かくて我は大使命をうくるもの也。

○いろ〳〵に思ふはその人を思へばなり。思ひかたがねれねば功少し。人を思ふは己を省るに如くはなし。己のみつゝしめば此内他を思ふことになる也。

人の懺悔と改心とを要求せんより、自らつとめよ。何事もみな自分の影と見る能はざるは信不足の爲め也。此結論に從へば一切衆生成佛せずば、我正覺を取らじといふことになる也。曾ていひし、比丘法藏の願は即我願と一つ也と。

○何人にもまして佛子は大任をせ負ふ。帝王宰相は多く一代をせ負ふ。佛子は三世十方を荷ふ。任重からずや。

○任重きものは業大なり。業大なるものは大多忙、寸時の閑もなき筈也。現時、カイゼル、アスキス、露帝、ボ大統領、將又ウイルソン、袁大總統、我大隈伯の如きすら、尙日夜大多忙を極めつゝあり。佛子は是れにもまして多忙なるべき也。若し然らざれば佛子にあらざる也。

○たとへ下駄を直し一箸の米飯をいたゞくもその契緣者をして復活せしむるを得ば重大ならずや。一偉人出現するも世界を動かす也。況んや幾多の偉人を產むべき佛子を作るに於をや。故に眞の佛子、眞の神の子ならざるべからず。

○余は嚴密なる佛の審判を受くる事を喜ぶ。唯佛にのみ余の至愚至昧なるを懺悔せん。懺悔は至心になし得、また唯心にのみ懺悔する事に滿足せず身を十字架にのせねばならぬ事を必す。如何に人がいふとも又思ふともそは已むを得ざる也。實よりよく見られなば德を損じ實より惡く見られんには我心あし。全き事をなして十字架に上るも亦運命なり。如何なることにも信不退なるべし。此一信こそ我生命無量壽なり。

第一眞實の長者(富豪)とは自分の身の爲に人を犧牲にせざる生活を爲すものなり、不陰德をなさぬ生活を爲すもの也。多からん事を望んで得られざるは眞の貧者なり。多く來るをも天に還して人に分ち、已、第一淸淨の行を爲して而も己に何等の贅澤をなさゞる是を眞實の長者といふ也。其來るべき正當の理由なくして來り又偶然かち得し財物は之を佛の物として保管すること禍なけれども己のものとして得々たること危し。人の喜んで捨つること財は淨し。此意味に非ずして集るものを不淨財といふ。不淨財の如何に多く集るともそは長者富めるものに非ざる也。世に眞に富富めるもの少し。眞に富む者は已に濟うして他に寄與し世を利し人天を益することこ多し。

嚴密に神の審きに預らむ。神ぞしろしめす。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

物質は正直なり

盲同人　住田藏人

私がまだ別府に住んでゐた時の事である。或夜の事、友人の爲に四五町許りの處を道案内させられた事があつた。その歸途、四辻の所で、小石に躓いて、足をこねた拍子に下駄の緒が切れた。私はその時ふと厭なおもひがした。『人の爲めにかうして行つて、こんな目にあふなんて馬鹿らしい、行かなんだらよかつた。下駄をすげやうにも茅はなし下駄も下駄だ、こんな處で切れやがつて。』と思はず下駄を恨んだ。その時ふと又腹の底の方から一つの聲がして、

『あゝ然うだ。下駄の緒は何も知らぬ、さうして切れる時機が來たから正直に切れたまでの事だ。のみならず、下駄の緒としては、矢張自分の性を完うして、出來る限り長い間つながつて居たかつたらうに、それを私の身體の重味がかゝつて、踏み切つたから仕方なしに切れたのだ。』

『あゝさうだ、それは私が悪かつた。この下駄を穿いて以來、幾度か私の足がこねやうとした時に、精力を盡して支へて呉れた、そして今となつては遂に力及ばずその身を犠牲にして潔く切れて呉れたのだ。あゝ濟まぬ、堪忍して呉れ！』

かう思つた時、何となしに氣がのんびりて、門口に人が群れてゐる前をも平氣で片足を曳ずり〳〵家に歸り着いたのであつた。この事があつて以來、私はいつも『物質は正直だなあ』と思はせられるのが常であつた。物質は正直だが、之に對して屡々怨を有つ人間は全く横着だと思ふやうになつた。たとへば燒傷をして痛さに、鐵瓶を擲げて見る人がまゝある。鐵瓶は五徳に危く掛けられてあつた爲めに、何かの拍子で覆るまゝに覆つただけである、又火にかゝつた湯は蒸發するまゝに蒸發したに過ぎぬ。それが注意の足らぬ人間の手にかゝたので火傷したに過ぎぬ。萬一、こんな條件の下におかれた鐵瓶にして、轉覆せず、火の上にかゝつた湯にして蒸發せず、手にかゝつた湯氣にして火傷を起さなかつたとしたら、その物質は阿諛したのであるとも云へやう。又、物にぶつかつてよくその物を叩いて憤つてゐる人がある。實は、その物體は、自分の位置を正直に保つて、立てられた處にぢつと立つてゐたのである。それにあわてた人間がやつて來て自分でぶつかつたのである。これも萬一その物體が、人が來た時によけたとしたら、之亦諂ひではあるまいか。など色々に考へるにつけ愈々人間の横着心からくる間違ひと、物質の怡然とした正直さとを對照して見ずにはをれなかつた。

物質は正直なり、そは叩かれるまゝに響き、打たるゝ
がまゝに破れ、集めらるゝがまゝに形づくればなり。
我も亦彼の如くありたきものなり。（同人扶桑記）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

御子息御重態の際に於ける天香さん

扶桑

理一郎さんの御病氣が急にあらたまりましたについて、天香さんの御心配もさぞかしこお察し申し、其事を中心こして、先生の御心持を伺うて見ました。其時に先生の仰せられた尊いお言葉は、自分一人で聽いておくにはあまりに惜しいやうに思はれ、玆に載せて皆樣こ共に深く味はせて頂きたいこ思ひます。

天香さんは靜かに仰言いました。

『御親切に、色々有がたう。理一郎の病氣については、私こしても可成心を使うてをります。實は、三十日の夜六時に京へ着くこ云ふ事は病人が知つて、時計を握つて待ち焦れて居つたこ云ふ事を耳にしましたので、驛に着くこ直ぐにも飛んで行きたい心は一杯でしたが、一方には大切な同人を二十人餘りもお預りして居ますので、其晩は一燈園の方へ寄せて貰ひました。其翌日も、留守中に堆積した、のっぴきならぬ用事で、一日御奉公させて貰ひましたので、遂に病人の方はそのまゝになつて居たのを、今朝は床の中から、法喜に、病人を見舞ふ事を急き立てられて、直ぐに行かうこ思ひましたが、此の儘、不用意に、この身體だけ馳けつけた處で無意味な事やこ思ひました。熱の高い患者であれば氷嚢を持つて行けばよいのですが、さて今の私は何を持つて行くのが病人にこつて一番よい見舞であらうかこ考へさせられました。で直ぐに、一番よい氣持で病人に接してやる事が何よりも病人にごつての歡びであり、且つまた慰めであるこ云ふ事に氣がつきました。暫時靜坐させて貰うて居るうちに、次の二首がうかんで來ました。

血を吐かば吐くにまかせてお光を
たゞへてすゝめ父がゆく道を

日々に會はぬ日こては無きものを
見て嬉しきは人ごゝろかも

早速にこの二首を土產こして濟世病院まで見舞にまゐりました。ドアーを押して這入つた病人の手を握つて、『會ひたかつたか？わしも會ひたかつた。お前も、もう死ぬさうやが、死ね。二人で死なう。』さう云うてベッドに椅子をよせて二時間程話しました。

『さうしてゐうちにもお客が澤山待つてゝ下さるこ云ふので、電話が繁々こかゝつてまゐります。そこで私は理一郎に申しました。

『理一郎、わしはこのまゝ二人で死なうこ思うた、併し電話であゝして切りにわしを呼んでゐられる聲がする。お前はまだ二三日は死ねさうもない。二人こもに仕殘した用事がまだある筈ぢや。わしに死花を咲かせて呉れる爲めにわしをもう一度、十字街道に送つて呉れぬか？』

理一郎は答へました。

『どうぞ、私に心おきなくお出かけ下さい。』

そこで私は、聲を改めまして、

『理一郎、わしはお前の病氣で居る事を一刻も忘れる事は出來ん。それでこれから十字街道に出て御奉公する事はお前こ此處にかうして居るより以上に有意義にあらせたく思ふ。でわしの托鉢にこつてお前の病氣はそのまゝ完全な祈りぢや。わしは光の中でお前の病氣を見舞ふ。いやかうお前はわしこ斷へず一緒に居たかつたら、どうぞこゝからわしの托鉢を祈つてくれ、そこでは二人た斷えず一つに居る事ができる。』

かう云つて別れたのでした。

『わしは理一郎を一時でも長く生しておいて貰ひたい。わしが理一郎の傍に居れば、彼を寂しがらせるかもしれぬ死にたくないこ云ふ氣持を起さすかもしれぬ。餘命幾何もない短い時間をそうした妄想に浪費させるこ云ふ事は、益々彼の生を縮める事になる。もしこれから先の許された時間を光の爲めに祈りつめる事ができたならば、それは轉々こして煩惱に苦しむ三十年、五十年、百年を娑婆で暮して居る人達よりも長い生命に値する事であらうこ思ひます。その事に依つてのみ、わしは理一郎をより長く生かす事が出來るこ信じます。』

先生のお話はこれで盡きました。この尊いお話はたゞに死に臨した病人を傍らにおいてのみ考ふべきものではあるまいこ思ひます。既に棄恩入無爲の生涯に這入つて托鉢の一路を取つた同人のお光の名においてのみ捨てる事を許された肉身の父母兄弟に對しては、この深い祈りを朝暮に忘れる事は出來ないこ思はれます。この祈りの中にこそ人情に背き恩を棄てた者の償があるのであるこ思ひます。

終に、天香さんが理一郎さんを見舞ふ代りに、お忙しい時間を割いては書き送られた端書の文句に、

『此機會に極度に寂たる信境をあじはへ、われ今朝、靜かに信念をこらして御身の爲めに祈れり、大丈夫也、信も愛も、情も、われすべてをしれり。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

しかして御身にすゝむ。此機會に、糸よりも細き信念の呼吸にすべてを忘れよ。是永世也。われつねに之れを以て御身を見舞ふ。（七月三日）

『何のさわりもないよいきもちこそ、是永遠のいのち、これのない百年の壽命長からず、これある一時、是短くなし。（七月六日）

『この丸をかくこきの（一圓相の直下の南無佛こあり）さわりなき心を念ぜよ。又血を吐く時があるこしても、今かふ平靜になりやすいやういをするがよい。

御身の爲めにわたしは中々修養をさしてもらふ。少しも油斷せぬやう、油斷せぬこは、りきむのではない、細い息すゞしい息、たのしい息、これを少しでも三千大千世界のおのが家にみなぎらせておくがよい。おのが家をかくして莊嚴しておきなさい。きのふ關口さんがきられた、あなたの先夜のはなしをして共に修養のかてにしてもらふた。すべて感謝々々。是永世也。（七月七日）

表紙題字　本號のは聖武天皇御筆盧舍那像讃（天平三年九月八日寫了）の中から載かせて貰ひました。

湯西川温泉にて

かなめ

鬼怒川や川べり近き湯にひたり河鹿きゝ居れば雨こなりたり。

湯西川川べり添への湯の宿の屋根ぐしに咲く白百合の花。

赤々こ夕陽は沈む屋根ぐしに浮び出でたり白百合の花。

湯の壷ゆ光みなぎりあふれつゝ月はも昇る明神嶽に。

雪降れば鹿が湯あみに來るてふ湯壷に青き苔は生ひたり。

ころころこ何の蟲ぞも小夜更けてこの湯の隅にしのび鳴けるは。

小夜更けこ夜は更けぬらしひそひそこ月にそむきて女湯あみす。

獨白

八田勝三

死んだ者が蘇らぬ限り、正義の戰とは、良心を糊塗せんとする美名である、眞理を忘却した文字に過ぎない。殺人が法律で罰せらるゝならば、國家も眞理の前には何時か裁かる可きものと信ずる。

頃來、新聞紙の傳ふる所に依れば、歐洲大戰勃發の八週年紀念として、去る七月廿九日、英國全土に亘つて戰爭絕滅の示威運動が、倫敦勞働者の大群集によつて行はれたそうである。これ深甚なりし戰禍に刺擊せられて、漸々迷夢より覺めんとせる人心の當然赴くべき到着點である。然かもその實現的運動が、智識階級に始らずして比較的敎養の暇なき勞働階級に先鞭をつけられしは、或ひは生活の脅威に因するならんも、興味ある現象である。

今や骰子は投げられたり。兎もあれ私達平和を愛好する者は、自ら爭ひの種を少なくし、語默動靜、行ひを徹して祈るのだ。素直に「ハイ」と返事する所にも平和な氣分は生じ、下駄を揃へるやうな一瑣事からも寂光上へ通ずる道が開かれる。

○

自殺未遂――と云ふのは、狂信に近い行爲を怖れて、御亭主が信仰するのを禁じた所、間もなく內儀樣の妹が病死した。それをすつかり佛罰と思ひ込んだ彼女は、死を以て御詫びする外無いと考へて、銚子の犬吠岬燈臺下から投身したが、幸ひ岩に打ち上げられて助けられた。それで元通り信仰に歸れば治るだらうとの相談の結果、賴まれて、附添ひとなりて、下總行德にある原木山妙行寺へ行つた。そこは日蓮宗の祈禱道場で、病める者、狂へる人が緣者に連れられて御參籠して居る。每朝四時から晚の十時迄、殆んど十八時間打通しに、消滅大鼓の音につれて、唱うる物凄き計りの南無妙法蓮華經！　そこには一切の科學無く、自發的にはた强制的に法力に賴り、賴らせんとする有樣は寧ろ悲壯の感じがする。

○

私はこゝで附添ひと云ふよりも看視の苦しさをしみ〴〵知つた。壁一重隔てゝも見えない人間の哀れさを今更ら乍ら痛感した。罪惡感に伴ふ恐怖は次第に銳くなつて、『自分のやうな罪深いものが居れば御堂が遺れる。唱名せんとしても咽喉がつまる。胸が板のやうになる。氣狂が夜中怒鳴り出すと、私が一つ蚊帳にねて居るからだ。病人が死ぬと

私が觸つたからだ………………』と云つた風に、心から信じ切つて居るらしい內儀樣を、每日居堪らない心持に襲はれて、一寸眼を離すと御寺から脫け出す。それを相手の感情を害はないやうに、這ひ廻る赤ん坊を御守させて貰つて居るやうな心持で、氣をつけて居やうと思ひつゝも何時か刑事のやうな心、法官のやうな態度に不知不識なつて居る自分を見せつけられて、時々泪ぐんで了ふ。又逃げ出されて、『自殺されやしまいか』と不安に馳られ乍ら探し廻つて、やつとの事で見出し、言葉は無益だと思ひつゝ、御說教し、一緒に道傍に座り込んで祈り、『御寺へ歸りませう』と勸めても聞かれず、已を得ず力もて連れて歸らうとすれば抵抗される苦しさ。『彼女の心理なり、我が今步んで居る生活より想到する時、最善の方法だと信じ得ないのに、無理から御寺に連れて歸るのは、當を得て居ない、身體で御題目を唱へる行き方に早々かへるのだ。』など後刻は考へるが、その時は多少感情に支配されて、手荒に引摺つて歸る嫌な事が度々あつた。精神病者の氣の毒な事を知り過ぎる位分つて居乍ら、心から、仕へ切れない淺間しさには自分乍ら愛想がつきる。

○

で到頭御寺を引揚げさせて貰つて、內儀樣の舊主人御宅に保養旁々の托鉢をさせて頂かれるやう、許して貰つた處結果は大變好いやうである。色々の點から私の至らぬを氣付かせて貰ひ、光の力無しには、何處かに無理が出來る事を事々に知らせて下つた事を、私は內儀樣に感謝せざるを得ない。

○

『合掌』は文字通りに合掌であり度い。殆んど習慣的に書き下す『拜啓』と唯文字丈けを換えたに過ぎない、一燈園言葉に墮しては、寧ろ使はざるに如かず。流行は決して眞物を生まないものだ。

○

『有難う御座います』が蓄音機的になつてはならない。乞食は、時に何等感謝の心持無しに、感謝の言葉を連發して居る。

○

丁寧らしく頭を下げる事が謙遜の表象ぢやない。座布團を敷かない事が下座を行じる事ぢやない。托鉢業になつては恐ろしい僞善だ。懺悔を忘るゝ時全生命は滅びる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

托鉢のあと

三石勝五郎

窓ふき

窓ふきは
信州の生れた國の
女學校の廊下で
天香さんとやつて見た

私の知り合が
不思議さうに見つけて
「君はお弟子樣が」

と、からかひ半分に通りすぎ
天香さんの講演のあとの
うるさい足どりよ

私の敎へた女生徒は
便所の隅で托鉢の私を
へんな目付で見てゐたが
やがて、雜巾かけ出した……

天香さんがおつしやるに
「やつて見なけりや
わかりませぬ」

なるほど
此の生活はやつて見て
はじめてかほる油汗
下にゐて、かみしめる

私は東京に

天香さんは
私の袂の袷せの肩先をつかんで
これを筒袖になほしてもらひなさい
と、同人の宅の奥さんを紹介する
そこでお晝をいたゞいたら
新宿まで片道電車切符をあけるさかいに
そこから下りて半里程お步きなさい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

さうすれば××の鑛工場はわかります

さ、上野驛でお別れする時
新聞紙をひきさいて
萬年筆で走り書き
それが工場への紹介書だ

私はヒラ〳〵する紙片を大切にして
プラットホームに前橋行の
天香さんの一行を見送りする
勝淳さんも御一所に……

私はひとり
東京に取殘された
汽車が見えなくなると
大地から湧きあがる程のさびしさが
迫つた

秋の櫻葉は白くひかる
上野の高台に
とほり〳〵のぼる

蒸し熱い私の靈

一切を捨てゝ
おゝ、これから托鉢か

くもの子の如く

青山の神學院で
障子張りをしてゐると
今日の陽のぬくさ
秋もふけて、どこかの隅で
こほろぎがないた——

チリ〳〵と電話
天香さんから當番さまを通じで
「これから直ぐ慶應義塾の
佛教講演會の方へ行つて下さい」

おゝそれなら午後一時からの
今日の講演會に天香さんも出られるのか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

おい、それ、AもBも私も
障子張りやめて、すつたこつたこ
電車通りへ駈け出した

托鉢する身のいそがしさ
東京なればにぎやかに
くもの子の如くまきちらされていきてをり
金もなく、パンもなく
又、宛もなく
めぐまれていくるよろこび

信仰の芽

中桐さんのおつしやるに
なんぼ天香さんだつて
神様でもあるまい
佛様でもめるまい

それを世間では
神様のやうにしたがり
佛様にしてかづき廻る

流行の神様にされた
天香さんこそわざはひだ

救世主の出現
世界平和の宣傳者
ほめそやすはよいけれど

好奇心のいたづらにめがさめて
人々ば御神體を投げ出すとき
天香さんにはかはりがないが
隨喜した涙のあとはひからびて
猫も杓子ももとの姿のちりほこり

信仰の芽を取りて
新らしき命に植ゑよ

雪、燈、涙

雪しら〳〵とふり
あかき灯はたそがれのかげに
もえさかる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

たれかゐて呼んでゐやうだ

樹の影深く立ちよろめき
山の色はうすけれど重き谷をかこむ
ひとりゐてさびしく躍るたましひは――
浮きあがり又しづむ

われはほゝえみて
しつかりといだきつく幻は誰か
がら〳〵ところげ落ちた
心のひゞき――

はつとして
眼をつむり
深淵にかぎりなき
ざんげの浮をそゝぐ

――曙一燈園にて――

雲の如く

おゝ、大願は雲の如く湧くけれど、影もなく

心の羽ばたきに一刹那はにげてゆく
永遠に求めるものは何か
聲もなし、あともなし
山にはたゞ大きくかゝる青空の鏡ばかり

――田ノ澤鑛山を出發して――

草

朝起きて
草むしりしたはよけれ
奥樣は
私のむしつた草を見て
「これは主人がわざ〳〵
夜店で求めた花の咲く草」

おゝ、しくじつた
奥樣にへいつくばつてあやまれば
そこへ御主人樣が見え
「なんに、たつた二錢の安物を
花咲かぬまゝ、投げた草」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

眞木子

磯山松男

托鉢に來よてふ故郷(くに)の消息に
別れて遠き吾子をしぞ思ふ

うみの親のちちははを知らずすこやかに生ひゆくといふ眞木子し思ほゆ

ばあちやんの茶碗に片手をかけにつつ御飯たべゐる眞木子が眼に見ゆ

ふさふさと黒髮ながくのびたらむ風呂に入れども洗はせざらむ

裏庭の柏の枝に繩つるしぶらんこしてやあそびゐるならむ

柏の葉もぎてまんぢゆうをつくるらむりよう手にもちてあまりたるらむ（田舍節句）

くれなゐの霧島つつじ咲き出れば來る蝶蝶を追はむとすらむ

溫床のなすびの苗を引き拔きて叱られて逃ぐる眞木子を思ふ

庭の面にあなを探して韮入れて眞木子も蟲をつらすとすらむ

束のまも心はなれぬ子の面わ
眼のあたり見て何か思はむ

うつそみの父ぞといひど知らなくにまぢまぢと顔をみまもりにけり

ひきよせていだけどなほも默しつつ指をくわいてうつむきにけり

眞木子よと笑ひていへばやうやくにわが顔に手をふれにけるかも

抱かれしひざよりすべりおりゆきておもちやひらうてわれにしめすも

めぐまれし着物出して見せれども喜ばん心いまだおこらず（藤井の奥さんへ）

ゴム靴は赤かりし故手にもちて離さんとせなく遊びゐるかも

畑よりかへりて來れば遊びゐし眞木子手をあげてはしりきたるも

われを見てはせくる眞木子の足どりのおぼつかなけれどもころばずに來る

心足りてひたに抱けばふさふさのびたる髮が頰にふれてゐる

眞木子をたかくさしあげゝれば青梅のつぶらなる實をひとつとりにけり

よろこびに心踴らむハモニカを吹けばなるなり眞木子の口に

眞木子がよだれ流して吹くハモニカはいつもおなじき音をのみぞ出す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

六

七歳の時から僧房に入つて禪堂生活を三年積んだと云ふ曹洞宗の雛僧は因襲其物のやうな然も食ふ爲めの僧侶であり、職業に墮落した僧堂生活に堪へきれず宗祖道元禪師の遺風を慕ひ、道元の型を輝き出し度い爲めに一切の俗緣を擲つて來たのだと云ふ。

「一燈園に道元禪師の型を認めてお出でになつたのですか。道元禪師のうちに一燈園を認めておいでになつたのですか。」

天香師は問題の核心に觸れて行かれた。

「道元禪師のうちに一燈園を認めてゞす。」

「東京にも其麼方がありました、矢張り曹洞宗の方で、其方は直ちに十字街頭に道元其儘にお行りになつて居ます、ともにお行りになればいゝと思ひます、毎でも御紹介申します。」

此間に二三人既に手紙で入園の許を得て居る人との間に「お體はお達者ですか」とか、「御兩親を說得することが出來ましたか」とか「蒲團はお持ちになりましたのでせうね」とか「以前の生活と今の生活とどちらが人樣の爲めになるとお思ひですか」とか「辛いとお思ひになりませんか」と云ふやうな簡單な應答があつて、問答は「如何しても說敎が出來ませんので參りました」と一堂を笑はせた平安中學を出た島根縣濱田附近の本派本願寺末寺の青年の上に移つた。天香師は青年の率直さを愛するものゝやうに、

「人樣に說敎するのでなくて阿彌陀樣にお話するのだと思つたら如何ですか。」

「それでも出來ません、自分がつまらん恥しい生活をして居て人樣に敎へるなんて事は出來ません。ともに詫まらせて貰ふ事は出來ても……　其れでは檀家が承知しません。祖師の紙子の九十年の生活を說いても有難がりませんので、口が下手なのを幸ひ紙子の九十年の生活をほんとうに味はつて、それで說敎の雄辯にかへやうと思つたのです。」

「御父さんの御許しは得ましたか。」

「そんなら修業に行つてこいと云ひました。」
最後に早稲田大學の前身東京專門學校の哲學科に學び家業の醬油釀造をやつて居る四十の坂を二つ三つ過ぎた「六人子供があります」と云つて青年達の笑ひを招いた程此集まりでは老齢に數へられなければならぬ伊勢の人に向けられた。
「私のは若い人達のと違ひまして家庭がありますので此儘の生活で救ひが得たいと思ひますので如何すればよいか御相談に上つたのでした。私の宗教病は二十年からの慢性でしてな、二十歳時分――恰度此處に居られる人達の年頃から其芽生えがありましたのです、それが家庭に紛れて忘れて居ました、此頃になつて又芽をふいて來ました。」
「あなたのはよく解つ居てます、他にも五六人其麼方がありますから明日御ゆつくりお話しませう。」
此處で問答は終りを告げて天香師に用事のある人、天香師から用事のある人、相談したい人達の間に用件の言葉が交され別室で相談する人もあつた。
「天香さん、私は今晩は自分の用事やおへんがな。」
と、天香師の幼な馴染で大阪府池田町に養兎業を營んで居る人が呼び掛かけた。天香師は「自分の用事やおへん」と云ふのに「御苦勞です」と深い感謝を捧げて「何麼用事です」と打ち解けられた。
「嫁の世話をしましたんやがな、其れが澤山荷物を拵へると云ひますのや、荷物なんていらん云うても聞きまへんよつて、其れを中止さそ思ひましてあんたの智慧を借りに來ましたんや、よい考へはおへんか。」
「さあ、それは困りましたな、考へがあつても向ふが聞かなければ何もなりまへんさけな、此間岐阜の方にも此麼のがありました。或百姓屋の娘さんが「妾の嫁入りの支度の爲めに毎晩お父さんとお母さんが皆が寢靜まつてから圍爐裡の傍へ集まつて先祖代々から傳はつた田畠を賣る爲に泣きながら御相談して下さるのです、其れを聞いて居るのが身を斬るやうに痛うございますから何んとか止めさせて下さい」と云ふのです。支度金は二千圓と云ふのでしたかな、其れは好い都合に行きました。相方話をした上娘さんには裸でやるが其代りお光をつけて嫁がせると云ふので一燈園へ頂にくることになりました。何んなら其人を連れて來て頂けませんか。話せるだけ話して見ませう。嘗て見れば禁酒と節酒のやうなものですな節酒することは難かしいが禁酒することは易いものです一枚でも持つて來なかつたと笑はれるのですか、あの人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

は裸で來たと云へば其れまでゞすからな。」

「さう云へば其麼ものですな。」

それからそれへと用件は持ち出された。

七

暫て結縁の家から供養された鍵屋の餅菓子が配られお茶が出た、人々の間には談笑が交された。

「此頃の一燈園はまるで火事場のやうです、かう數多集まつて下さると此建物は小さ過ぎます、何んとかしなければなりませんが、如何しやうもありませんから、如何にかなる日を待つて居なければなりません。

天香師は語られる。

「十人程居ました時は二十人にもなつたら如何うなるかと思ひましたが、二十人になると三十人は大丈夫と云ふ氣がしました。此樣に七十人なんて這入れさうに思はれませんでしたが、かうして七十人が落ちつけますとまだ三十人位は大丈夫なんて考へられます。不思議なものですな。」

天香師は笑はれる。

「先日も此麼手紙を下すつた方がありました。今一燈園は滿員ですから暫く待つて下さいと申して遣りましたら一杯水を盛つたコップにでも一枚位木の葉が浮かないことは無からうと云つて來られました、軒の下位は明いて居るだらうと言ふのでした。恐縮するより他ありませんでした。物見遊山に來やうと云ふのでは無いのです。物好きに來やうと云ふのではないのです。裸になつて人樣の爲めに働きに來やうと云ふのですから其お心持は祈らずには居られませんでした。あなたは歳がお若いからと云ひましたら、信心の同朋に老若の別がないとこちらが敎へられる始末でした。若い人達の純情さには常に勵まされます。純一なものです。如何かすると途中で折れることがありますがね。」

九時の就寢時間はとつくに過ぎて十時にならうとして居た、明日の奉仕の手筈が當番の人に依つて決められた。

「手紙を下すつてお返事が後れることがありましてもお許し下さい。書かないのではなくて旅行して不在なのですから、不自由な處は私の至らぬ爲だとお許し下さい。では皆樣おやすみ下さい。」

懺悔し祈るやうに天香師は皆の前に默禮して二階に上つて行かれた。尙用件の盡きぬ人は二階で用件を果した。靜かさ其もののやうであつたこの室も戰場のやうな動亂が起きた。人々の手に寢床が延べられるのであつた。それも暫し、人々は不自由を忍びつゝ二人或は三人が一つの床にも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ぐつて一切をお光に任せて深い眠りに就いた。光の間も禪堂も階上も凡てを寢室にして。記者と伊勢の人はお客樣だと云ふので特別に勞られて毛布まで當てがはれて一つ床に寢た。寢靜まつた時女の道友が寢床の裾を全部叩いて廻られた。如何にも女性らしい細い心遣ひが暖く床しく偲ばれた。靜かな道友達の寢息に鹿ケ谷の夜は更けて行つた。動物園の鳥の鳴き聲が一層閑寂を偲ばせて。

食堂から拍子木が響いた、起床の知らせだ。道友達は一齊に飛起きた。寢床を上げ箒を手にした雜巾を掛けた唯元氣よく立働いた。人々の口から「南無阿彌陀佛」の名號が自からほとばしり出た。外は未だ暗かつた。淡雪がほんのりと凍てついた大地の上を薄化粧して星は明けの前奏曲を奏でゝ居るかのやうに其一時をまたゝいて居た。京の灯は遙か下に明滅して夜の名殘を止めて居た。天香師も箒を手にし雜巾を持たれることに變りはなかつた。食堂の竈には朝飯の火が赤々と燃えて居た。三十分も經たぬ間に一燈園は淨められた。手水をつかつた道友達は思ひ思ひの場所に靜座した。六時から天香師を導師として禪堂に朝の祈りが上げられた、宣詞と心經が誦せられてから天香師の朝誡が始められた。合掌しながら諄々として深い叡智を示し行乞の實感を語られるのであつた。「先に居る人は決して後から來た人に敎へるやうな態度を執らないやうに、後から來た人は決して批評の態度で人を見ないやうに」と盲人が梶を執つて荒波を乘りきつて難波船を救つて目の明いて居る人をあつと云はした話だとか、芋の種を欲しがつて居る人に一人の爺さんが芋種を持つて行くと、此麼ものを持つて來てと土中の中へ蹂躪つて其上爺さんに唾を吐き掛けたが、爺さんは怒りもせず「あゝ有難い。石の上へ蹂躪らずにようこそ土の中へ埋めて下された芋は芽をふく事が出來ます」と云つて其人に感謝を捧げた。其後芋は爺さんの言つた通り芽をふいて土地の人達に惠みをもたらせたが、村の人達が爺さんに感謝を捧げやうとした時扨其爺さんが誰であつたか解らなかつた」と云ふ說話を擧げて一燈園の生活を說かれた。「黑の行乞服の動く處にお光を輝かせて頂きますやうに」と或同人の奉仕が極度のヒステリーの婦人を癒やして居る事實を物語り、行乞の場合の注意を細やかに與へて私が危ない生活をして居るのに皆樣をたしなめたりすることはお許し下さい、いけない事はともに祈らせて下さい」と結んで三拜された。筒袖の行乞姿が僧衣のやうにも輝いて居た。道友達は代り合つて一汁一菜の麥飯の膳に着いて夫れぞれ決められた奉仕先に一日の奉仕を樂みに急いだ。どこかで七時を打つて居た。自分はお光の働きを尊く拜みつゝ坂を下つた。

（終）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

托鉢者を迎へて

山陰　石田哲明

私しが一燈園生活を聞きましたのは大正十一年の春でした、東京池袋の成溪學園から發行される「母と子」と云ふ雜誌であつたと思ひます、それに何か一燈園生活の事が一寸書いてありましたのを見て、おぼろげながら一燈園生活の事を印象に止めて居たのであります、其中に新聞の廣告で「懺悔の生活」が出版された事を知りまして早速土地の本屋に買求めに行きましたが、まだ本が來て居ないので特に注文をして取寄せて頂きました。

私は「懺悔の生活」を讀んで幾度かうろほひのある感じに打たれた事か知れません、爾來私は未知の一燈園なり西田先生が何となく非常に親しく感ぜられてならなかつのです、處が本年の三月上旬私の友人が新聞紙上で西田先生一行が山陰地方へ御越しになる事が出て居たと知らせてくれましたので最う私の心は確かりそれにひきつけられて、何とかして先生に面接して色々な事を伺ひ度いと考へて居ました。

偶々三月廿六日所用の爲め松江に出ての歸途ふと停車場で友人に會ひまして、「何處に行くか」と尋ねますと「今日午後母衣の小學校で西田先生の講演があるからそれを聽きに行くのだ」と云ふ。

さては松江に御越しになるのであつたか是非私も行きたいのであるが私は午後三時の汽車で歸らればならぬ約束がしてあるので誠に遺憾な事だと友人に訴へますと、丁度私の側に二十五六歳の御婦人が五歳位の孃さんを連れて立て居ましたが、私の此の言葉を聞きつけて、「若し西田先生の御談しなら今月三十日に米子の公會堂に御座います」と告げ、それから今まで簸川郡地方で御講演の在つた事やら托鉢の事など語られた。

私は此の話しを聞いて飛び立つ程に嬉しく思ひまして松江では縁がないけれども米子では萬難を排して是非御伺ひしなければならぬと云ひつゝ、上りの汽車に乘つたのであります。

ふと私の向ふを見ると先刻私に敎へて下さつた御婦人がちやんと乘つて居られます

私は四五分間其婦人を凝視して色々な事を考へました如何して此の婦人は西田さんを知つて居るのであらふ？　先づ此の婦人に聞いて見たら一番早解りだと思つて、やつとの思ひで、

「貴女は西田さんに就て御存じの樣ですが一燈園に御越しになつた事でもあるのですか」と尋ねると、「はいそうです暫時の間一燈園に居た者であります」之を聞いて私は益々考へさせられた、遂に私は「貴女は如何して一燈園に御越しになつたのです」と問はざるを得なくなつた、すると其婦人は「なんと申上げたらいゝでせう？　私は全く行き詰つた結果遂に一燈園にふとした因縁で救はれたのであります」と云ひつゝ瞑想でもせらるゝ樣な態度であつた、私は此の「行き詰つて救はれた」と云ふ言葉を聞いて最早默して居られない樣な氣がしました、「如何して貴女は行き詰りなさいましたか？」と質問して見たいと云ふ言葉は咽喉元までこみ上げて居るけれども、じつとそれを抑制してしまひました、それは愼み深い婦人に對して深く立入つて質問すべく餘りに失禮であり僭越であるとの觀念からであつた。

やゝ暫時して私は名刺を出して、「私は斯

様な事業を經營して居るものであります、如何でせうか若し御一行の方で誰様でもよろしいが一晩私の無料宿泊所で御泊り下さつて、何にか私共の爲めに御經驗談でもして下さる譯けには行きませんでせうか?」すると御婦人は「一燈園の人は御談しすると云ふ事は餘り好まれないのであります、併し托鉢をさして頂く事なら喜んでさして頂きます」。「そうですかそれでは恐入りますが御言葉に甘へて托鉢をして頂きますから如何か宜敷御願ひ致します。」斯く語りつゝある間に汽車は早已に米子驛に着きました。其御婦人も私と共に下車されて、これから山陰日々新聞社に行き卅日の講演會の打合に參るのだと語られ御姓名を御尋れしたら大塚と云ふ者ですとの事であつた、早速私は宿泊所に行つて小川幹事に此の事を話して若し托鉢に來られたら是非御泊りして頂く様にするがよいと云ふて置いて自坊へ歸りました、それから二日程して私は宿泊所を訪づれると小川幹事が、

「實に濟まない事を致しました私が一寸出た留守に一燈園の方々が四五人も御越し下さつて全部掃除して下さつたと云ふ事を近所の小供が知らしてくれました、私は、不在をして誠に申譯けがありません、如何したらよいのでせう――。

私は之を聞いて大いに驚きました、折角あれ程に約束して置いて御越しを願つて一人も居なかつたと云ふのは實に失禮な事であつた、何とかして此の御詫びをしなければならぬ、併し已に過ぎ去つた事は致方もないが、兎に角三十日の午後は西田先生に公會堂で御目にかゝれるのだから其時に厚く御禮を申上げようと云つて、卅日の講演の日を待つて居ました。

愈卅日は來ました。西田先生の御講話は午後二時から五時までゞした、三百人程の聽衆は比較的智識階級の人が多かつた。先生は極無造作に一燈園生活に就て御話し下されたが、それが私には非常に重い壓力を感じさせました。

講演が濟みましてから先生に一昨日無料宿泊所へ托鉢して下さつた方々の御姓名を伺ふたが自分は一向に知らぬが今日此處へ來て下足番をして居る方々の中に或は一行の方があるかも知れぬから御尋れして御覧なさいとの事であつた。早速下足場へ行つて見ると四五人の方が一生懸命に下足を取扱ふて居なさる、其中の御一人に御尋れして見ると平野さんと云ふ方が、私が一昨日托鉢さして頂きましたと仰せになつた。之を聞いた時の私の喜びは眞にたとへ様のない程であつた、是非今晩宿泊所へ來て泊つて下さいと强ひて懇請すると、それでは私共は最早今晩の宿は確定して居ますけれども折角の事ですから後程西田さんと御相談して二人程御邪魔致しませうとの事であつた。

私は喜び勇んで宿泊所に歸つて小川幹事に此事を話して共に一宿の結縁を喜んだ。

併し茲に第二の不安が起つた、それは宿泊所とは云ひながらまだ創業當時とて設備が至つて不完全なため折角來て頂いても御饗應の支度が出來ないと云ふ事が何よりも不安であつた、けれどもたとへ御馳走はしなくとも誠心誠意を盡して御宿をすると云ふ其事が尊い結縁であると云ふ信仰の下に漸くせんべいとお茶を用意して待つて居ました。

御客の御越し下さるまでに私は明朝の御飯の支度にかゝりました、先づ公設市場へ澤庵香々を買ひに行くと折惡數澤庵がないといふ、それで福神漬を買つて紙に包んで歸る途中紙が破れて福神漬が皆地上に落ちてしまつた、再び店にひき返して再び福神漬を買つて、今度は竹の皮に包んで貰ひ漸くにして歸つた、そして小川幹事は豆腐や

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

味噌を買つて來て明朝の御汁の用意をしてくれた、其内に私は今晩西田先生の座談會が二葉園と云ふ東本願寺の說敎所にある筈なので其處へ一寸行つて來ると云ふて萬事を小川幹事に依賴して置いて出て行つた。私が座談會から歸つたのは十一時過ぎであつた、歸つて見たら已に二人の方が休んで居られた、明朝になつて御姓名を聞くと平野淳吉さん龜井潤司樣と云ふ方であるとの事、此の朝小川幹事は早やく起きて御飯を炊きかけた、私も一緒に起き樣と思つたが然うする事に依つてまだ早いのに折角寢んで居られる御客を起しては氣の毒であると思ふて、私はわざと寢床の中に入つて居ると、臺所の方でシヤツタ――と云ふ聲が聞えた、何事が起つたかとそつと床をぬけ出て臺所に行つて見ると、如何なる事か土竈が破れて釜が落ちあたり一面に米が散ばつて居る。小川幹事は茫然として、シヤツタ〳〵を連發して、如何したと聞くと餘り大きい火を焚きまして遂竈が破れました、如何したら宜いのでせう？そこで直ちに竈を石を拾ひよせ修繕して第二の米をしかけて漸く御飯をたき上げた、かくして、男のみ二人で不完全な膳立をして不味な御茶で朝食を差上げた、これでも私共の誠心誠意の御馳走だつた。やがて御二人は御立ちになる、雨はシト〳〵降出した、雨傘が一本しかないので、さし合傘で二人は停車場指して御立ちになる、私共は其後姿を合掌して尊く感じました、眞に其時の氣分は何とも言ひ樣のない感じがしました、併し私共は折角御とめ申して何等の待遇をもなし得なかつたことを深く遺憾に思つて居ます、今でも小川幹事と此事を話して誠に濟まないと云ふ氣が離れません。

平野さんや龜井さんは其後如何して居なさるのか、又無料宿泊所へ托鉢して下さつた方々に本來ならば一々御禮を出したいのですが御名前さへ解らないので、せめて光の紙上でゞも感謝の意志表示がしたいものと思ひ、かく拙なき筆を運ばせて頂きました。終りに一燈園御同人の方々の御健在を祈り、益々光の生活をはつきり遊ばされん事を偏へに御願ひ申上げます。

（一一、六、二九）

松下吉衛著

現代の經濟生活と懺悔奉仕の道

立光社パンフレット第一冊

代價二十錢　郵稅不要

發行所　東京市外戸塚町上戸塚五八〇　立光社

ばか平の話

松下吉衛

平吉(へいきち)さんは、ことし三十にもなる若ものですが、みんなから、『ばか平』『ばか平』といはれて居ます。平吉さんを、ばかものあつかへにするのは、他人ばかりではありませんば、弟も妹も、何かにつけて、よくごまかしたり、からかつたりしました。二三年前、およめさんをもらつたこともあるのですが、これも、あきれてにげて行つてしまつたのださうです。

お父さんお母さんは、

『平吉にも困つたものだ。親のよく目かは知れないが、まんざらのばかでも、なささうだけれど、あゝ慾(よく)がなくつて正直すぎては、世の中がわたれやしまい。』と、しじうこぼして居ました。

でも、平吉さん自身は、ばかといはれやうが、こけこけなされやうが、一向(いつこう)平氣で、ついぞ、はらを立てたことがありません。

そして、たのまれゝば、どんないやな仕事でも、よろこんでしますし、困つた人にあへば、きてゐる着物でも、はいてゐる下駄までも、やつてしまひます。

ですから、平吉さんのみなりは、年中ぼろ〳〵で、かみの毛や顔のひげなども、のびがちで、そのへんを歩いてゐる人たちにくらべると、何となく、うすぎたなく思はれます。これも、ばかにされる一つの原因(げんいん)になつてゐることはいふまでもありません。

ば末まちのろぢなどで、よごれほうだいになつてゐるごみ箱のあたりを、よ念なく掃(は)き淨(きよ)めてゐる平吉さんの見すぼらしいつゝ袖姿(そですがた)は、せいぐ、屑(くづ)ひろひ位にしか、とれません。ですから、うすぎたない奴(やつ)が、うろついてゐる位に、流し目をくれて、通りすぎる人は、たまにあつても、外にたれも見向きすらする者はありません。

それでも、きたいに、子供たちとは、仲よしで、平吉さんの姿さへ見つけると『この間のお話のつゞきをしておくれ』の、『竹馬がこわれたから直しておくれ』の、『一所に山

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

遊びに行かう』のと、三人も五人も子供がよつて來ては、せがむのです。

平吉さんは、子供のことが大好きですから、ひまさへあれば、どこでゞも、子供の相手になつて、お話をしてきかせたり、歌をうたつたり、球なげ、なわとび、何でも一所になつて遊びもすれば、また、讀本や算術などのおけいこをしてやりました。

ですから、子供たちは、平吉さんのことが、學校の先生よりも、お家のお父さんお母さんよりも、誰よりも好きでした。學校では先生にしかられてばかり居るわん白者でもお母さんやお父さんの前で鼻聲なんか出して、すねるあまい子でも、平吉さんと一所に居る時は、きたいに、すなほなよい子になります。

それで居て、平吉さんは、どんないたづら子のことでも小言らしい小言ひとついはないのですから、不思議ではありませんか？

かうして、平吉さんの味方は、子供たちと貧乏人だけなのです。あとの人は、誰ひとり『平吉さん』などと本名をよぶものはありません。

『ばか平は、此頃どうしたつていふのだらう。あんなりつぱな自分の家があるのに、そこへは、あまり、よりつきもしないで、貧乏人の家をぐる〳〵とまわりあるいてゐるのださうだ。』と、一人が言へば、

『氣でも狂つてしまつたのかな、とう〳〵。ばか平め！ばかつ正直で、氣狂ひときちや、世話なしだ。』などと合づちをうつものがあります。さうかと思へば、

『あんなせがれをもつちや、年よつた親御が、さぞ心配なことだらう。』と、思ひやりのあることを言ふ人もあります。

ところが、おかしなこともあればあるものです。この氣狂とうわさゝれ、ばかあつかへにされてゐる平吉さんがとまつてゐる、ある貧乏人の家へ、とつぜんりつぱな仕度をした人が、馬車にのつて、たづねてきました。

『平吉さんといふお方が、こちらに、あがつてゐるさうですね。』

げんくわんも何もついてゐない、たゞ一つ部屋の家ですから、折から、勝手の方で何か洗ひものでもしてをつたものと見えて、手をふき〳〵平吉さんはでゝまゐりました。

『ハイ、平吉といふのは私でございます。こゝのおかみさんがご病氣なものですから、五六日前から、お手傳にあがつてゐるのです。』

『さやうでございますか。實は、私、王さまからお使に

まゐつたのですが、あなたさまをおたづねして、この品をおあげ申せとの仰せでございます。』

と、いつて、見るもまばゆい錦のつゝみを、差しだしました。

平吉さんは、あんまり意外なので、

『それは人ちがひでせう。私はさういふものを頂くわけがありません。』と、かたくことわつて、どうしても受け取らないのです。

そのうちに、三人五人と、方々から集つてきて、やがてそこに、人垣がきづかれました。なかには、うらやましさうな顔も見えました、たまげたやうな顔もありました。

『おいていく』、『受け取らぬ』の押し問答で、中々、ことが、きまらなさうでしたが、そこへ、五つばかりに見える光ほうといふ子供がでゝきて、

『平おぢさん！　あんなにくれたがつてゐるんだもの、おもらひよ！』

と、言つたので、平吉さんも、とう／＼、根まけがしてその錦のつゝみを頂くことにしました。

王さまのお使は『これで安心した』と、いつたやうに、にこ／＼しながら、ていねいにあいさつをして、馬車にのつてかへつて行きました。

さあさうすると、ひやうばんが大へんです。ばか平のところへ、わざ／＼、王さまからお使があつて、大したごほうびを下さつたといふので、そつちでもこつちでも、よるとさわると、その話ばかりです。今が今まで、『ばか平』『ばか平』といつて、平吉さんを、ばかあつかへにして居た連中は、狐にでもつまゝれたやうな氣がいたしました。弟や妹の平吉さんにたいするたいども、がらりかわりました兩親たちも、自分のむすこが――世間からあんなにばかにされて居たあの平吉が、王さまからごほうびにあづかつたとは、どう考へても、ゆめとしか思へませんでした。

こんなに、あたりのものが、皆、さわいだり、たまげたり、不思議がつたりして居るのに、ご本人の平吉さんは、一向、平氣なもので、昨日も今日もかわりなく、ぼろつ着物を着て、にこ／＼しながら、とほ／＼方々あるいて、頼まれ仕事をしてやつたり、病氣や何かで困つてゐる人を訪ねたり、暇さへあれば子供を集めて一所に無邪氣なあそびをして居ります。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

惡魔の群

吉田暎二

時　ある戰國時代

所　ある山國の一城下

人

老僧　　僧若い僧甲　　僧乙

僧丙　　僧丁　　他に僧大勢

A子（老僧の娘）

B子（A子の母）

C子

敵將　　武士一　　武士二

武士三　　其他武士大勢

その他　　鐘樓守　　町の人々等大勢

備考　實演又は必要な時は各人物に名前を附ける。
舞臺の右左は總べて見物席より見て云ふ。

第一幕

ある山國の一城下の寺院。その僧房の一間である。緣付の二重。庫裡本堂に續く右左に廊下。正面が出入の襖、及佛壇、壁。壁の前には經机が重なり積まれてある。緣に近く二つの經机。佛壇の横に常夜燈。
（幕が明くと、僧甲、乙、丙、丁の四人對話最中。時刻は黄昏。）

甲――敵は何處まで來たのですか。

乙――向ひの山の裏側は、悉く敵兵で埋められてゐるさうです。

丙――味方の兵士達は散々にやられたさうですね。

乙――御家老の率ゐた二千人の軍勢は、あの峠下ですつかり敗北したさうです。それで僅か八百人許りがやつとの事で、峠を上つて此方へ下りて來たさうです。ほう／＼の體で。

丙――味方の兵はみんなどうしたでせう。

乙――いづれ捕へられたか、殺されたかしましたらう。

丙――何と云ふ非道い事だ。………峠の固めは大丈夫でせうか。

乙――大丈夫の樣です。今日はもうお城主が御自身御出馬で指揮なされてゐるさうです。

甲――南や東の峠も大丈夫でせうか。

乙――勿論ぬかりはありますまい。

丙――何だか袋の中の鼠の樣で心細くなりましたね。

丁――然しこれも束の間でせう。隣國の援兵はもう三四日の内に見えませうから。

乙――お使者はとうに立つたのださうです。お使者が此處へ歸て來る時には隣國の精兵も大方一緒に來てくれるでせう。

丁――さうなればあの敵兵の敗北は眼に見えてゐます。

丙――一日も早く援兵が來るやうお祈りする外、仕方がありませんね。

丁――然し援兵がなくても一月や二月は大丈夫支へられます。糧食だつて兵士だつて、さう悲觀したものではありますま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

い。此國はたゞ小さくて山國であるだけに糧食と兵士に乏しいのです。然し、人間の心はしつかりしてゐます。それは他國にひけは取りますまい。

丙――それでも多勢に無勢と云ふ事がありますから。

丁――何ァに、多勢はよく無勢に敗けるものですよ。

丙――それでも若しこちらが敗けたら何うなりませう。

乙――それこそ一大事です。今迄あの敵軍の通つた後を見ると、あらゆる暴戾と惡虐が行はれて居ます。もし敗けでもしたらこの町は全部燒拂はれて終ひませう。而して、男も女も子供も老人も悉く彼等の辱めにあひ、むごたらしいことをされるでせう。S國のある町など彼等が一つの燒野にして仕舞つたさうです。驚く事には、あの有名な城までが悉く取毀たれて、其處には人影一つ見えなくなり、黑い燒木杭(やけぼくくい)の下や、赤い壁土からはもう草が生えてゐるといふ話です。

丙――吾々も、そんな運命にあひませうか。

乙――どうだかわかりません。

丁――そんな馬鹿な事があるものですか。きつと此の國が勝ちますよ、大丈夫。

甲――さう安心も出來ますまいが、負ける事は考へるのも恐ろしい氣持がします。

丙――なぜ戰爭なんぞするんでせうね。

丙――まつたくそれを考へると人間が心細くなります。世の中の恐しさが身にしみますね。なぜ、人の人とは融け合へないのでせう。仲良く出來ないのでせう。戰爭をする事が、自分に得をしてゐないと云ふ事位なぜ悟らないのでせう……………然し今は亂世です。末世です。佛の御說法など亂世に血迷つてゐる人々の耳にはとても入りますまい。

乙――さうでせうとも、自分達は佛を祝福し、その慈悲を說く。しかし、これとても一つの世渡りの方便ではありませんか。この弱肉强食の世に、善を蒔き正を裁(つちか)つた處で、その芽も出ない中に皆蹂躙されるのはわかり切つた事です。

甲――では、あなたは私達の役目を何とお考へになりますか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

乙――私は僧侶と云ふものは、死者の靈を祭るだけで澤山だと考へます。これが泰平の時であるならば御説法もよいかもしれません。しかし今のやうな世柄ではとうてい無駄だと思ひます。今は御説法の時代ではなく力の時代なのですからね。

丙――あなたは、この恐ろしい世を是認なさらうとするのですか。

乙――いや是認はしません。勿論、私とて、佛の御光の萬民の心に輝くのを祈つてはゐます。しかし　どうにも仕方がない樣に思ひます。人々は名々自分の力を信じ、それを專らに振り廻さうとしてゐます。力の足りない者はそれを嘆き、力の出る樣にと神佛に祈つてゐる。而してその得た力は何處に使はうと云ふのか。矢張り弱き者を虐げるに用ひるのではありませんか。こんな世に宗教が、學問が、何の役に立ちませう。私達は默つて見てゐるより、又は死人の墓の番人でもしてゐるより仕方がないではありませんか。私はかうした亂世を毫末も肯定する氣はありませんが、默認しなくてはならないと思ひます。………………で又、かうした世の中も時々やつて來た方がいゝでせう。

丙――と云ふのは。

乙――戰爭は進行ですからね。破壞ではあるが、次に建設を齎します。破壞建設の循環が世に進歩を齎す事は誰も認める事でせう。戰爭はその循環を早めます。一時は善きも惡しきも一包みとして破壞します。善きものに對しては氣の毒です。然し惡しきものに對しても此上ない破壞力です。そして一旦は善惡共に叩きつぶされますが、眞によきものは、かゝる打擊で消え失せはしないでせう。必ず芽を出します。而して花が咲きませう。其處に文化の一段すゝんだ新しい世界が出ては來ますまいか。その時こそ佛の光は宇內に普く照り輝き、人々の胸には愛が甦りませう。

（この間から僧甲いら〳〵と默し難き面持ちになる。而して僧乙の話の切れるとすぐそれに被せる樣に。）

甲――それは間違ひではありますまいか。

乙――間違ひですと。

甲――主戰論者の云ふ事は常にそれだ、結果だけしか考へてゐない。

（一同驚いて甲を見る。）

乙――あなたは何と御考へになる。

甲――私達は、勿論、人間の進歩を考へます。しかし、それは善への進歩でなければならない。この善への進歩が戰爭によつて行はれるとは思ひません。なぜなれば、戰爭といふ戰爭は悉く利害關係を含んでゐます。善惡共に叩きつぶされるのも、利害の爲めの犧牲ではやりきれません。かうして花咲く善は矢張り利害の爲めの方便善です。あなたは戰爭の後の破壞からは善のみ生れると仰有つたが、何で善のみが生れませう。惡がはびこるに決つてゐるではありませんか。斯くなれば何處に進歩があります。又元の世の中に歸つた事になるではありませんか。或は戰爭によつて毒された世の中はかへつて惡くなるかもしれません。さうなれば退歩ですからね。私はいかなる場合にも爭はよいものを齎さないと思ひます。私は無爭鬪の國の實現を夢見てゐます。こゝへ人々を導いて行くこそ、私達の大事な務めだと思ひます。かゝる亂世こそ私達の奮鬪しなくてはならない時だと思ひます。その心持がなくて何でほんとに死者の靈が祭れるでしようか。私達は墓を守り、經を讀む商人ではないのですから。

乙――(嘲笑する樣に)あなたは未だ若い。若い中は何んでも、さう云ふ風にはやり立つものだ。而して高遠な理想を立てるものだ。しかし私位の年になるとあきらめが出て來る。

甲――そのあきらめはあなたの墮落を意味してゐる。

乙――(屹となつて)何に墮落ぢやと?……………

甲――墮落だ。墮落だ。僧でゐて僧の役目を知らず、その役目に生きる事を知らない。これが墮落でなくて何んでせう。あなたは私達佛門を毒する惡魔だ。佛門以外に居て、佛を毒するより更に惡い事だ。又恐しい事だ。

乙――(怒つて)惡魔とは何事だ。(押へつける樣に)あなたはまだ若い。それだから……………

甲――若い事が正論の弱點とはならない。年は若くとも法を思ふ心は人に讓らない自信があります。

乙――何處までも私を侮辱する氣でゐられるのか。あなたは何の口で私を惡魔だと云ふ事が出來る。どの口で私を佛を毒するものと云ふ事が出來る。よくあなた自身を考へて見るがいゝ。私はあなたの爲めに、これを口外はしますまいそれは又私の卑怯にもなる事だから。

甲――何が私にあるのですか。私が佛を毒する事を行ひましたか。云ひましたか。人々に自分をかばふ爲めにありもしない事を私に云ふとは、あなたは益々佛の…………

乙――まア、よく考へて見なさい。

甲――考へる處がありません。何もさう遠廻しでなく、はつきりと云つて下さい。

乙――私はあなたの爲めに云はずに…………

甲――私のために云つて下さい。

乙――（暫く躊躇して後）では云ひませう。…………あなたは自身の淺ましさを蔽へると思つてるのか。（間）あなたは、女犯の罪の事をよく考へるがいゝ。

（と立上る。一同は驚いて甲を見る。甲は打たれたもの、樣に青ざめる。）

乙――（冷笑を浮べて）よく考へて見られる事だ。お師匠樣は常に云はれる、人の罪を責める前に自分の罪を謝せと。それをよく考へて見られる事だ。（去る）

丙――（氣の毒さうに）乙殿は中々我説を曲げない人です。私も確かに、あなたの説に正しさを認めてゐます。それはよくわかつてゐるんです。

丁――（なだめる樣に）私達はあなたを信じてゐます。乙殿も決して惡い人ではないが、むきになる癖があります。氣をお沈めなさい。私達はあなたを信じてゐます。（あたりを見廻して）もう夕方の御勤めの時ですね。（と丙に云ふ。）

丙――知らない間に、大變暗くなりましたね。そろそろ本堂の方へ行きませうか。

丁――甲殿、私達はさきに參ります。あとからすぐに御出でなさい。…………何をお泣きなさる。侮辱を受けられたあなたの心はよくわかります。

甲――（小さな聲で）あなた方は私を信じて吳れますか。

丙――勿論信じますとも。

甲――今の乙殿の云つた最後の言葉の妄りである事も。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

丁——（暫くして）信じます。

甲——有り難う御座います。私もすぐ後から參ります。

（遠くに喊聲が聞える。丙、丁、思はず顏を見合はす。）

丙——鬨の聲ですね。

丁——さうの樣です。

丙——どうしたのでせう。（と不安さうな面持。）

丁——武士達の勢揃ひでせう。

丙——さうでせうか。

甲——何んだか外が騷しいではありませんか。

丙——さうですね。

丁——何アにさうではありませんよ。

（奥から梵鐘の聲が聞えて來る。）

丁——さアもうお勤めだ。行きませう。

丙——え〻。…………（甲に）ではお先きへ。

甲——すぐ參ります。

（丙丁去る。暮色迫る。坊の一遇にある常夜燈の灯がはつきりと見えて來る。）

甲——乙殿は如何うしてC子の事を知つてゐるのだらう。何處かで聞いたのか。恐しい。誰にも隱してゐた罪が、しみ〴〵と身に迫つて來た。いや惡い行ではない。戀がなんで惡い行だらう。罪だらう。お師匠樣も「戀は人の通らねばならぬ一つの關門だ」と仰有つた。それを隱れて行つてゐた事が惡いのだ。純な心持を忘れた自分が惡いのだ。……もうぢきにお師匠樣の御耳にもC子の事は入るだらう。もう入つてゐるかもしれない。…………然し、私にはお師匠樣に打開けるだけの勇氣がないのだ。…………それにしても乙殿は、何と云ふ恐しい人だ。自分の危さを人の罪を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

あばく事によつて救はうとするのだ。人の罪をせめるなと云ふお師匠樣のお言葉を引き乍ら、私を責めるのだ。……けれども私が惡いのだから仕方がない。あゝ……………（沈む）

（鐘樓守の老人手に手紙をもつて出る。）

老人――甲樣。お勤めには、まだ御出でなされなかつたのかな。

甲――あゝお爺さん。

老人――又あの女の人が手紙を持つて來ましたよ。

甲――あゝさうですか。いつも〳〵御迷惑をかけて濟みません。（手紙を受取る）お爺さんは私を隨分淺ましい人間だと思つてゐるでせうね。僧侶の身であり乍らこんな…………

老人――何アに、坊主も人間さ、わしはお前さんの心持がよくわかりますよ。それにあの女の人もわしの見た處いゝ人間だ。眞實な處がある。熱い眞心が光つてゐる。わしはお前さん達二人の仲をいつも祈つてゐますよ。

甲――有り難う。お爺さん。あのC子さんもほんとにいゝ人なんですよ。尊い位なんです。それに又あんな不幸な人もありますまい。

老人――みなし子だとか云ひましたね。

甲――えゝ、兩親とも小さい時に死んでしまつたんです。

老人――それで今何處に居るのですかね。

甲――遠い親類に當るので、あの城下はづれの料理屋に引とられて居るのですか、女中と同じ樣に使はれてゐるのです。

老人――さうかね。…………矢つ張り氣の毒な人だ。…………だが心配はいりませんよ。御師匠樣もよくわかつて居らつしやる方だ。あの人も女には隨分苦勞されたから。

甲――御師匠樣も苦まれましたか。

老人――わしは、それをよく知つてゐる。お師匠樣は子供まで御持ちだ。

甲――え。子供まで。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

老人――その母御も、その娘御も、この城下に居られるはずだ。わしはお師匠樣が、その娘御を持つた時分、一宗の衆から散々に苦められた事を知つてゐる。その女が又遊女だつたのが、尙一宗の衆の怒りを强くしたのぢや。

甲――まあ。

老人――それでも强かつた。お師匠樣は一度關はつた女を周圍の强要で見棄てる事は出來ぬとおつしやつた。其の時分始終お師匠樣は、何ぜ僧侶は戀をしてはならないのかと考へてゐられたものだ。或時はお經文を破られて土足にかけられた。

甲――まあ。

老人――一宗の人々が寄られてお師匠樣を放逐しようとした時、御師匠樣は其等の人々と大變議論をされたさうだ。而して「戀によつて虐げられた僧を佛が見放すとしたら、その僧は何によつて救はれるのか」と仰つた時、これに誰も答へる事が出來なかつたさうだ。それでお師匠樣も此處に居られる樣になつたのださうだ。お師匠樣はこの出來事を後で大變後悔してゐらつした。逐はれるまゝに追はれゝばよかつたのだとおつしやつてゐた。然しこの事件でお師匠樣は、何れだけ深くおなりだつたか、偉くおなりだつたか。

甲――而して、その娘御方は何うなさいました。

老人――それきり往來は絕つた。往來はないが、お師匠樣と、その女の方とはいへも心でお合ひなすつてゐらつしやるだらう。

甲――お師匠樣はそんな事は唯の一度も御話になつた事はありません。

老人――話されるのがおつらいのだらう。昔を知つてゐる人には、よく「わしの一生の弱さの紀念だ」とおつしやるから。

甲――隨分お寂しいでせうね。

老人――御氣の毒でもあるさ。（立上る）

（あたりは旣に眞暗である。常夜燈のみ明るい。）

老人――（空を仰いで）今夜は月がない。又鐘樓に上つたら、北や東の空は戰場の篝で輝いてゐるだらう。……………では、

甲様お邪魔しました。

甲――どうも有難う御座いました。（辭儀をする。老人は去る。梵鐘讀經の聲は常に奥より洩れる。甲立上つて常夜燈の傍によつて手紙を見る。）

甲――今夜――もう出る事も出來ぬかもしれない。――でも待たしては濟まない。――きつとゐるに違ひない。――何と云ふ淺ましさだ。

（この時鬨の聲四方に起り、あたり急に騷しくなる。甲、驚いてあたりを見廻す。坊の前庭に矢が二三本飛んで來る。小坊主駈け込む。）

子坊主――大變だ。大變だ。（甲に氣がつき）や甲様大變だ、北の峠が落ちたのだ。もう敵兵は雪崩込んで來ます。

甲――えつ北の峠が敗れた？　北の？

（僧乙丙丁、其他の大勢急ぎ出る。）

丙――峠が敗れましたつて？

甲――さうださうです。

丁――敵が町へ入つて來ましたか。

子坊主――通りへ出れば、峠を下つて來る敵兵の松火が、まるで蛇の樣にうねつてゐるのが見えます。

乙――外のあの騷ぎをお聞きなさい。

丙――おゝ、町の人々の逃げる聲が、（矢が二三本流れて來る）アッ又矢が。もう敵はすぐそばまで來てゐるのでせう。

丁――一體、どうした事でせう。

子坊主――闇にまぎれて討つた敵の伏兵に、まんまと引きかゝつてしまつたんださうです。

丙――もう一刻もぢつとしてはゐられません。逃げませう。早く逃げなければどうなるかわかりませんからね。

他の僧――さうしませう。さうしませう。

（又も矢が飛んで來る。而して一本は僧坊の緣に立つ。）

――（つゞく）――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

返照錄

〇平野眞澄姉（宇都宮） 毎日御多忙に御くらしの御事と御察し申上げます、此度の禁酒の御演説も定めし多くの方々に有がたい感動を御與へ遊ばした事とかげながら御よろこび申上げます。私は御覺えになつていらつしやるかも知れませぬが、京都から御供をさせて頂き東京ステイションで御別れ致しました平野と申す者で御座います。天香先生もはや京都へ御歸りの頃と存じますが御日どりはいつ頃で御座いませうか、實は御歸りにも御供をさせて頂く筈で御座いましたが折あしく家内に三人も病人が出來毎日看護に忙殺され一週間位は到底手がはなせぬので今度は御供をさせて頂く事はむづかしいだらうと悲しんで居ります。けれども病人たちが快方に向き次第京都へ參り有がたい御教へを受け、一度絶望したこの人生に希望と光明とを認める樣になりたいと願つて居ります。今月の五日に初めて先生に御目に懸りましてからはこの世の中がほんとに明るくなつた樣な氣が致し毎日有がたい感謝に滿ちて生きて居ります。東京ステイションで先生に御別れ致しましてからは何だかつッかい棒が取れた樣な賴りなさと淋しさとを覺えました、それにつけても先生の偉大でゐらつしやる事を切に感じました、親の手に依つて荒い風にも當らずに育つた若木が、結婚といふ暴風に吹き荒らされて今にも枯れんばかりになりました時、漸く先生の慈手に依つて再び頭をもたげました、五年の間の苦しい暴風に痛められ傷けられたこの若木がどうぞ先生の御手に依つてどんな暴風にもびくともしない樣な健全な大木になります樣にと私は毎日祈つて居ります、今までは生家へ歸へるのが私の唯一の樂しみで有り慰めでご座いました、けれども今の私は唯一の樂しみである生家へ歸つて來て居て一日も早く一燈園へ參られます樣にと祈つて居ります。

三人の病人の中の祖母は老衰と中風とで一番手がかゝります、失禮な御話で御座いますが兩便の世話まで人手にかゝります、今まではそんな世話は母が致して居りましたのですけれども私が參りましてからは大抵私がいたして居ります、どんなきたないものゝ仕末でもお洗濯でも有がたい崇高な氣持ちで致されますのには我ながら不思議でございます、家の者などは私がこんな不幸な境遇になりまして歸つて參りましたのですからさぞ悲しみ惱むで居る事だらうと思つて居たらしうございますが、案外にも私が前よりもニコ〳〵して樂しさうによく働きますので驚いてゐるらしうございますこれも皆先生のお力と有がたく感銘致して居ります、只今病氣で床について居ります妹も自我が強い爲めに隨分惱みの多い人間でございますが、私が持つて參りました懺悔の生活を讀みましてからは全快次第ぜひ先生にお目に懸り一燈園に入れて頂き度いと申して居ります、これまで書きました事が私および私の周圍に起りました先生にお目に懸つてからの有がたい變化でございます。私は病人たちの病症次第で廿五日頃でございましたらお歸りのお供をさせて頂く事が出來るかも知れませぬ故、ご多忙中恐れ入りますがご出發の時日を一寸おしらせ下さいますれば幸に存じます。ご多忙中長い手紙を書きましてさぞかしご迷惑の御事とおわび申上げます。いつもおいそがしい先生の事でございますから、どうぞご無理をあそばしませぬ樣にかげながら祈つて居ります、まづは右御しらせかた〴〵御伺ひまで申上ますめでたく。かしく

大正十一年九月十四日印刷（代金二十錢）
大正十一年九月十五日發行（郵送料不要）

東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行兼印刷人　中桐確太郎

印刷所　株式會社一匡印刷所

東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社

京都市柳ノ馬場三條下ル
取次所　宣光社
振替大阪五九八三九番

東京市外戸塚町上戸塚五八〇
取次所　立光社

京都 東寺濟世病院長・ドクトル 小林參三郎著

生命の神祕

四六版三百二十頁
着色版一葉
凸版十數葉
英國特製布表紙

定價 金貳圓
送料 金拾四錢

不治の難症に悩む者此新福音に聽け。科學を偏重して人間本具の生存力を無視せる現代醫學の缺陷を剔抉し、故岡田先生の遺業靜座法を醫術に應用して、幾多の患者を救濟せし新研究也。

▼本書の著者は永く英米獨にありて科學的醫術の蘊奥を極めたる人、嘗て自ら不治の難患に苦める時、一僧侶の法話を聽いて豁然大悟する所あり、幸にも偶々九死に一生を得て、生存力の祕密を躬自ら體驗し、玆に主客圓融、科學と宗教との合致したる醫界 Epoch-making の療法を發見したり。後年故岡田先生につき靜座法を修得して益々所信を確かめ不治を宣せられし患者を再起せしめたる事數千人に及ぶ。而して衆望の歸する所、眞言宗東寺派の濟世病院に推されて長たる事十年也。

▼心身に憂ひ悩みある者、將に大手術を受けんとする者、不治の宣告を受けて生存の意義を見失へる者、速に本書を一讀せよ。生存力と醫術とを合致せしめ、靜座を基礎としたる新療法によりて、幾多不起の患者を全癒せしめし實驗談と其の方法とは、極めて平明に解說さる。

目次

總論、本論、(一)神經衰弱症 (二)暗示暗示感覺自家暗示 (三)婦人科病、(四)慢性胃病、(五)心臓病、(六)思ひより身體に起る病、(七)肺結核、(八)近親者の看護は結果惡し、(九)腸の慢性疾患、(十)喘息、(十一)慢性腎臓病、(十二)蓄膿症、(十三)子宮筋腫、(十四)脫腸、(十五)泌尿症、(十六)子宮脫、(十七)痔瘻、結論、靜座法、

圖書目錄進呈

東京神田表神保町
春秋社
振替東京二四八六一
電話神田二一三八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

橋井孝三郎著

（最新刊）

仰臥五年奇蹟に生く

□□獄中記病牀錄信仰篇□□

維れ、命旦夕に迫れる著者が血涙を以て綴りし一個高貴なる人間記錄也。暗慘たる牢獄生活と不治の病を通じて宗敎に入れる魂の過程の表示也。嗚呼此の極度の忍苦、不壞の信仰、正に現世のヨブ記の稱に値せずや。

▽前年豚箱事件として天下の耳目を聳動せしめし京都府市の疑獄は、なほ世人の記憶に新なるものあらん。著者は少壯政治家として頗る前途を囑目せられし人、偶々政敵の嫉視を受けて此の疑獄に連座し罪なうして縲紲の辱を受くる事再度、止んぬる哉、獄中に於て惡性の肺結核に襲はる、所となりぬ。幸に法は著者の身の靑天白日を證したりしも、病は遂に癒えず、廢人として仰臥する事滿九年！

▽既に喀くべき血、瘦すべき肉なく、枯木の如き殘骸なれども、裏一片の赤心抑ふべからず、病苦を忍んで此の一書をなす。戰慄すべき獄中の見聞記、同情の淚を絞る病牀の感想、法悅に溢る、信仰の生活の告白――之を點綴するに痛烈なる社會批評あり、裁判權否定の辯あり、慇懃なる妻子への遺訓あり、慘話、哀話、悲話、歡話一頁を繰りて、章を追ふに躍つて展開す。最近出版界に異彩を放つべき一書として敢て大方の批評を乞ふ。

上製 本綴 美本
定價 金貳圓參拾錢
送料 金拾六錢

圖書目錄 進呈
東京神田表神保町
春秋社
振替東京二四八六一
電話神田二一三八

大正十年八月五日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十一年九月十四日印刷納本
『光』第十五號